

## 金松岑と曾樸の『孽海花』

麦 生 登 美 江

『孽海花』を最初に構想し執筆したのは曾樸の友人の金松岑<sup>1)</sup>であるが、その金松岑の原作は第一回と第二回の二回分だけが『江蘇』<sup>2)</sup>の第八期に掲載されている。曾樸は1934年、『孽海花』の創作動機について、

光緒30年(1904)、私が上海で病氣療養中に小説林書局を創立し、蘇州の金一(字は松岑)が『孽海花』と題した原稿を送って来た。計六回分であった。私はそれを書直し、さらに賽金花を縦糸とし、清末三十年間の朝野の軼事を横糸として一冊の長編小説を作るよう手紙でもちかけた。金一はその気力がないのでそれをすべて私に委任すると返信して来た。だから初版の『孽海花』の第一回にはなお金一の手筆が残っている。<sup>3)</sup>

と語っているが、金松岑はこれについて以下のような補足説明を加えている。

曾樸が語っている『孽海花』創作の動機はすべてがその通りというわけではない。この書は私が江蘇省の留日学生が編輯していた《江蘇》のために

1) 金松岑(1874-1947)即ち金一。名は天羽、天翮、号は鶴舄。筆名は麒麟、愛自由者、天放樓主人など。江蘇吳江の人。1903年、上海で愛国学社に参加。1904年、『自由血』(ロシア虚無党史の翻訳)と『三十三年之落花夢』(宮崎滔天著『三十三年の夢』の翻訳)の盛行により政府の弾圧を受け郷里に隠棲。民国初年には江蘇省議員に当選したが、後半生は教育に力を注いだ。

2) 江蘇同郷会が編輯した雑誌。日本の東京で発行。1903年4月に創刊され、翌年4月、12期で停刊。本稿で筆者が使用したのは中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会蔵本、中華民國57年9月1日影印初版、羅家倫主編《中華民國史料叢編》A7.4であるが、『孽海花資料』(魏紹昌編、中華書局出版、1962年4月第一版、以下『資料』と略記)に引用されているものとの間には表2(64頁)のように若干、字句の異同がある。

3) 「東亜病夫訪問記」『資料』140頁。魏氏の注釈によれば、この訪問記はもともと上海の申時通訊社の記者、崔万秋が書いた新聞記事で、1934年11月25、26日、上海の《申報》、《新聞報》などに掲載された。

作ったものである。当時、各省の留日学生は《浙江潮》などたくさんの刊行物を出していた。《江蘇》が私に求めた作品は論著と小説であった。私は中国がちょうどその時ロシアの外交に注意を払っており、各地に対露同志会の組織ができていたので、ロシアに出仕した洪文卿を主人公とし、賽金花を脇役に配したのである。それには時代的背景があったわけで、随意に取上げたのではない。私が六回まで書いて中止していると、常熟の丁芝孫、徐念慈、曾孟樸が小説林社を創立し、私に相談を持ちかけて来た。私は小説をあまり好まなかったので孟樸に後を続けるよう依頼した。孟樸の第一回と第二回は比較的よく私の原文を残している。その予定した六十回の回目は私と孟樸が一緒に考えて決めたものである。<sup>4)</sup>

1904年3月出版の『自由血』に掲載された『孽海花』の広告には、

この書は賽金花の一生の歴史を述べ、内容は中露交渉、パミール境界事件、ロシア虚無党事件、東三省事件、最近の上海の革命事件、東京の義勇隊事件、広西事件、日露交渉事件を含み、現在、ロシアが東三省を占拠していることまでで終る。また多くの掌故、学理、逸話、遺聞を含み、精采があってひじょうにおもしろい。<sup>5)</sup>

とあり、これから金松岑の最初の構想がうかがえる。しかし、この年の夏から秋の間に六回分の原稿が曾樸に渡され、曾樸は三か月の間に一気に完成に二十回まで書き上げるのである。ところで、『江蘇』掲載の二回分と、曾樸の二十回本<sup>6)</sup>とを比較すると、以下のように長短あわせて第一回では十四か所、第二回では十三か所、計二十七か所の相違がある。

では次に金本と曾本の異同について検討してみよう。<sup>7)</sup> まず曾本の省略部分

4) 「金松岑談《孽海花》」同前146頁。原題は《孽海花造意者金一先生訪問記》で、含涼生（即ち范煙橋）と署す。1934年11月30日、蘇州の《明報》の、范煙橋主編による《明晶》副刊に掲載。

5) 『資料』134頁。

6) 歴史小説『孽海花』第一集 編著者 東亜病夫 発行者 小説林社 乙巳正月初版（これは目加田誠先生の蔵本をコピーさせていただいた。但し、第二集は第6版）

7) 金松岑が「曾樸の第一回と第二回は比較的よく私の原文を残している」と言っている以上、三回から六回まではとくに大幅な書換えがあったと想像されるので、金松岑の六回分の原稿と曾樸の二十回本とを比較できればおもしろいと思う。魏氏あたりに曾樸の埋もれた資料とともに金松岑の原稿の探索もお願いしたい所である。

表 1. 『江蘇』本と二十回本との対照表（『孽海花資料』も参照した）

| 金松岑（『江蘇』） |     |    |                                  | 曾 樸（二十回本） |    |                                 |  |
|-----------|-----|----|----------------------------------|-----------|----|---------------------------------|--|
|           | 頁   | 行  | 第 一 回                            | 頁         | 行  | 第 一 回                           |  |
| (1)       | 115 | 7  | 如今先說〈出一〉個極野蠻奴隸的不自由國              | 2         | 1  | 如今先說個極野蠻自由的奴隸國                  |  |
|           | 116 | 1  | 中央緯度在北緯三十度〈之中〉<br>〈經度為〉東經百十度     |           | 4  | 地近北緯三十度，東經一百十度                  |  |
| (3)       |     | 4  | 獻媚異種的性格，伝下来一種<br>怎麼運命，怎麼因果       |           | 8  | 獻媚異族的性格，伝下来一種<br>甚麼運命，甚麼因果      |  |
| (4)       |     | 5  | 呂政，成吉思汗，飛蝶南，路<br>易十四的地位          |           | 9  | 呂政，奧古士都，成吉思汗，<br>路易十四的地位        |  |
| (5)       |     | 7  | 頑也頑到馮道，范文程的地位，<br>秀也秀到揚雄，錢謙益的地位  |           | 10 | 頑也頑到馮道，錢謙益的地位，<br>秀也秀到揚雄，趙子昂的地位 |  |
| (6)       |     | 13 | 禁不得〈風潮〉日曬月蝕                      | 3         | 6  | 禁不得月曬日蝕                         |  |
| (7)       |     | 13 | 一千九百零三年                          |           | 7  | 一千九百零四年                         |  |
| (8)       | 117 | 4  | ～117頁10行省略（188字）                 | 3         | 11 | ～6頁6行省略（790字）                   |  |
| (9)       | 118 | 1  | 絮果離奇，抑亦足翻                        | 6         | 10 | 絮果迷離，抑亦可翻                       |  |
| (10)      |     | 4  | 游幕 Chi-fu                        | 7         | 3  | 游幕 Sangton                      |  |
| (11)      |     | 6  | 某君頷之〈遂去〉                         |           | 5  | 某君頷之                            |  |
| (12)      |     | 9  | 故人之意                             |           | 8  | 故人之誼                            |  |
| (13)      |     | 12 | 駭魂懾魄                             |           | 11 | 駭魂振魄                            |  |
| (14)      | 119 | 2  | ～119頁6行省略（109字）                  | 8         | 4  | ～20頁7行省略（1487字）                 |  |
|           | 頁   | 行  | 第 二 回                            | 頁         | 行  | 第 二 回                           |  |
| (15)      | 119 | 7  | （回目）<br>世界強權俄人割地，<br>科名佳話學究談天    | 20        | 9  | （回目）<br>金榜誤人香魂墜地，<br>杏林話旧茗客談天   |  |
| (16)      | 119 | 8  | ～122頁1行省略（1027字）                 | 20        | 11 | 28頁9行省略（2506字）                  |  |
| (17)      | 122 | 1  | 这是同治五年〈那時〉普天同<br>慶               | 28        | 9  | 斯時正是大清朝同治五年，<br>〈大亂救平〉普天同慶      |  |
| (18)      |     | 3  | 蘇，松，常，鎮，太四府一州                    | 29        | 1  | 蘇，松，常，鎮，太幾州                     |  |
| (19)      |     | 4  | 其間蘇州〈一府〉的人民                      |           | 2  | 所以蘇州的人民                         |  |
| (20)      |     | 7  | 過了蘆溝橋，桑乾河                        |           | 5  | 過了蘆溝橋，〈渡了〉桑乾河                   |  |
| (21)      |     | 9  | 第三名探花王文在，是山西稷<br>山〈縣〉人；第二名榜眼黃自元， |           | 8  | 第三名探花黃文載，是山西稷<br>山人；第二名榜眼王慈源，是  |  |

|      |     |    |                          |    |   |  |                         |
|------|-----|----|--------------------------|----|---|--|-------------------------|
|      |     |    | 是湖南善化(県)人；第一名状元洪鈞        |    |   |  | 湖南善化人；第一名状元(是誰呢？却是)姓金名洵 |
| (22) | 123 | 2  | 那白須の老者                   | 30 | 4 | 那有須の老者   |                         |
| (23) |     | 4  | 洪文卿                      |    | 6 | 金雯青  |                         |
| (24) |     | 13 | 弊業師潘伯寅                   | 31 | 4 | 世叔潘八瀛  |                         |
| (25) | 124 | 2  | 下座の少年接口道：師叔爾說的話          |    | 7 | 下座的一个中年接口道：吾兄說的話                                     |                         |
| (26) |     | 3  | 文卿同窓兄                    |    | 8 | 雯青同年兄  |                         |
| (27) | 124 | 7  | 中年的忽望着外辺叫声道：『南春兄。』大家一齐看去 | 32 | 2 | 〈上座〉中年的忽〈然〉望着外辺叫声道：『肇廷兄。』大家一齐看去。〈正是；磊落眼前多俊物，光華海上耀文星〉 |                         |

表 2. 『江蘇』と『孽海花資料』の異同表 (注 2 参照)

|     | 頁   | 行  | 『江蘇』(第八期)                   | 頁  | 行  | 『孽海花資料』 |
|-----|-----|----|-----------------------------|----|----|---------|
| (1) | 115 | 2  | 直薄倖(倖と幸は同じ)                 | 2  | 2  | 真薄幸     |
| (2) | 116 | 4  | 伝下                          | 11 | 7  | 伝下〈来〉   |
| (3) | 117 | 5  | 到説                          | 12 | 8  | 倒説      |
| (4) | 117 | 10 | 到也                          |    | 12 | 倒也      |
| (5) | 119 | 3  | 好像……是(的)的(似的と同じく用いられることもある) | 14 | 4  | 好像……似的  |
| (6) | 119 | 11 | □二子                         | 22 | 10 | 第二子     |
| (7) | 120 | 5  | 算是〈僥倖〉不曾受                   | 23 | 2  | 算是不曾受   |
| (8) | 121 | 8  | 黒龍江的北地方                     | 24 | 1  | 黒龍江以北地方 |
| (9) | 121 | 12 | 怎莫样                         | 24 | 4  | 怎麼样     |

については、(1)は〈説個〉で分るし、(2)も曾本の方がスッキリしている。(6)の〈風潮〉はなくても構わない。(11)は「某君はうなづいて去って行った」ということばのすぐ前に「(妓女が)別れに臨んでもし富貴の身分になっても忘れないで下さいと言った」とあり、ここが別離のシーンである以上、某が立去って行くのは当然であるため〈遂去〉を省略したのだと思われる。(18)は、府は州の大きなものにすぎず、ことさら区別するまでもないと考えたのだろう。(19)も同じ。

『孽海花』の二十回本と三十回本を比較しても言えることだが、上述のようになくても分る字句はできるだけ省いて文体を簡潔にしようとする試みと、その反面、より詳しく説明して情況なり登場人物なりをリアルに理解させようとする試みは、車の両輪のように結びついているように思われる。その例が(17)でここは大乱後、人心を安んじるために科挙の試験が行われて雯青が状元に及第することを述べるくだりで、いよいよ主人公の登場ということになるわけで、それを強調するために「この時は正に」とか「大清朝」「大乱鎮まり」という字句を付加して、当時の情況を描写しようとしたのだと思われる。

(18)は落第した人々が帰郷するさまを述べた部分なのでやはり「蘆溝橋を過ぎ、桑乾河を渡って」と分けて叙述した方が、トボトボと故郷へ向う人々の有様が浮かび易い。(19)では突然現れた「肇廷」なる人物のさっそうたる様子を第二回の末尾でちょっと説明し、第三回への期待をつないでいる。

次に言い換えの部分であるが、まず(1)で孽海に沈没した奴楽島を、金本では「きわめて野蛮で奴隸的な不自由国」と規定しているのに対し、曾本では「きわめて野蛮で自由な奴隸国」と書き換えているのは興味深い。“奴楽”島については金本、曾本ともに、

年中空には低く暗雲がたれこめ晴れた日がないので新鮮な空気がきわめて欠乏している。皆さん、考えてもごらん下さい。あの、人がそれによって呼吸している空気は、国民がそれによって生活している自由のようなものでどうして欠くことができよう。……昔から世界の自由な空気を吸ったことがないので奴楽島の国民は自分では食物も功名も妻子もあり、自由でひじょうに楽しい国だと考えていた。古人はうまいことを言っている——「自由を！ 然らずんば死を！」果してその国の人民は野蛮で奴隸的で自由な幸福を享受し尽くした結果、死期が来てしまった。今から五十年前、およそ十九世紀の中葉、その奴楽島の周囲に突然怪風が起り大波が押し寄せて来たかと思うと、島の根はグラグラと揺れ動き今にも海神に巻き込まれそうになった。ところがその国の一般の国民はなお酔生夢死、毎日舞えや歌えやと楽しんで風流の遊びに耽り、自由の琴を撫で、自由の酒を飲み、自由の花を賞でていた。

とあり、ここには不自由な様子は一言も出て来ない。客観的にはともかく、主観的にはまったく「自由」である。とすれば、金本のように作者の見方で規定するより、曾本のように「野蛮で自由な奴隷国」とその状態のままに規定した方が妥当のように思われる。

(3)の「異種」と「異族」に関しては、「種」は「人種」を、「族」は「民族」を指すのであろうが、「人種」を生物学的な一方の極とすれば、「国民」は政治的な他方の極であり、「民族」はいわばこれら二つの極の中間に広範な文化の共同を契機として成立する集団である。<sup>8)</sup>従って「強権を崇拜し、異人種(曾本は異民族)に媚びへつらう性格を作り上げ、運命とか因果応報とかの迷信が伝承されて来たのである」という時、やはり「異種」よりは「異族」の方がふさわしいように思われる。さらに「～とか、～とか」と言う場合「甚麼～、甚麼～」が普通であり、「怎麼」を「甚麼」に換えたのは順当だと思う。

この「運命とか因果応報とかの迷信が伝承されて来たのである」に続く文章が(4)(5)で、

そのために帝王と言えは呂政、ジンギスカン、フェルディナント、ルイ十四世のような暴君か……国民と言えは馮道、苑文程のような頑固者か、揚雄、錢謙益のような要領のよい者ばかり。

となっており、(4)ではフェルディナントからオーガスタスに変わっている。それはおそらくオーガスタスの方がスケールが大きく有名だからであろう。

(5)では「頑固者」が馮道と范文程から馮道と錢謙益<sup>9)</sup>に変わり、「要領の良い者」が揚雄と錢謙益から揚雄と趙子昂<sup>10)</sup>に変わっている。金松岑が要領の良い者としてあげた錢謙益、曾樸が錢に代わってあげた趙子昂、ともに「要領が良い」者と誇られてもやむを得ないような行動をとっている。従って錢謙益については金本どおりで差支えないように思う。

8) 平凡社『世界大百科事典』参照

9) 錢謙益1582-1664 明末清初の詩人。字は受之。号は牧齋。江蘇常熟の人。明朝が滅びた時、明朝の一族の福王を立てて自ら礼部尚書となったが、清軍が迫るやただちに降伏し、清朝に仕えた。

10) 趙子昂1254-1322 元代美術界における復古主義の指導者。名は孟頫、号は松雪道人。呉興の人。宋の太祖の子孫でありながら元朝に仕えて栄進したため非難さる。

(7)に一年のズレがあるのは、金松岑が1903年に『孽海花』を執筆し、翌年、曾樸が引き継いだので、曾樸が奴楽島の沈没が現時点のことであることを強調するためにわざわざ1904年と書き直したものと考えられる。

(8)は金本188字に対し、曾本は790字と四倍以上に引き延ばしている。金本の方は、

さて中国に珍事が起こるといふ。それは何であらうか。天は中国に近々、二人の自由の神を降すといふ。しかし作者の考えではその神は天では自由であるが、一般的にはむしろ不自由な鬼であるにすぎない。というのはその神はすでに自由のために命を捧げてしまっているからである。だが全国の人々はそのために大騒ぎを始めた。その中に愛自由者という者がおり、そのニュースを聞くとわざわざ上海にとんで来てその自由の神に最敬礼し、ひれ伏して拝しようとしたがその神の所在がわからない。訊ねて回ったがみんなはっきり言えないようだ。ある日、街で《自由鐘》という小報を一枚買って宿に帰り開いてみると、あの最近沈没した孽海の中の奴楽島の珍しい歴史が書かれていておもしろそうだ。読んでみると……

という内容になっている。ところが曾本では

愛自由者が奴楽島のニュースを調べに上海へやって来るが、上海の人々を見てみると肥えふとったコンプラドルか、人々をだます新政委員か、短髪洋装のにせ革命党か、出まかせを並べたてる新聞社員で、みんな何事もなかったかのように太平無事な様子である。そこへ「大変だ！ 大変だ！ 日本とロシアが戦争をおっはじめた！ 東三省はもう危ない！」とどなる声。ところが「何が東三省だけなものか、十八省だつてとつくに危いよ」と冷笑する者がいる。愛自由者が、平和な世界がどうしてそんなに早く変わり得るのだらうと思いつつぼんやりと歩いているうちに、ある不思議な山に踏み込みそこで絶世の美女から歴史の巻物を手渡される。

というように変わっている。つまり曾本では自由の神の御光臨が削除され、代わりに祖国の危機の急迫にも気付かず、安穩に日を過ごしている人々の模様が描かれている点と、金本では新聞で読んだことになっている歴史が、曾本では「山は黄金の色を呈し、水は乳白の香を流し」という山中で巻物を渡されて読

むという幻想的なストーリーに変えられている点が異なっている。ここにファンタジックな物語を挿入することは、かえって清末三十年来の歴史を描出しようとする曾樸の意図<sup>11)</sup>とは矛盾するようであるが、それは「小説にはフィクションや神秘性はつきものだ」と考える曾樸の創作技巧であったのかもしれない。例えば「二十回本で煙台の妓女の復しゅうに叙述が及んでいるのは迷信的意味を含んでいて老新党の口吻である」という胡適の批判に対して、

私はこのような神秘性を含んだことは小説中によく見られることだと思う。ギリシャの三部曲の最後の一部が完全なる因果応報であることは言うまでもない。ローマン派中でもプロスペル・メリメの短編のごときはとくに不可思議な想像が多い。……近代象徴主義の作品でもあいまいで神怪な描写は少なからず見出だせるし、一律にそれを迷信として排斥することはできない。<sup>12)</sup>

と反駁しているし、文学作品と歴史とは違うのだ、ということも強調する。《申報》の記者の「《孽海花》では賽金花が美しく聡明で偉大な人物として描かれすぎていて実際と合わない」という発言に対して、

この記者は頭脳に明晰さを欠いていて文学作品と歴史の区別がつかないのだ。《孽海花》は畢竟小説であって伝記ではない。小説家は自分が描写する人物に対して自由な想像を働かせる権利を持っている。この記者がそれを察せず、書中の賽金花がすなわち今日の賽金花だと考えるなら、大いに失望するのも怪しむに足りない。<sup>13)</sup>

と反論し、また林琴南が「孽海花は小説ではなく三十年の歴史である」と述べたのに対し、

小説を書き始める時、相当の対象があるのは免れないが、しかしそのまま

11) 曾樸は金松岑の原稿に対して、「このまま書き続ければ、海上花列伝の方法からぬけ出すことが出来ないだろう。私の考えはそうではなく、主人公を借りて書中の筋書を作り、できるだけ最近三十年来の歴史を盛り込む」（「修改後要説的幾句話」）と述べているが、『自由血』の広告には“政治小説”とあるのに対し、曾樸が小説林社から出版した際には“歴史小説”と変更されていて、曾樸の執筆意図を裏付けている。

12) 同前「修改後要説的幾句話」

13) 『資料』142頁。



信史とみなして細かくせんさくするのは文芸作品がどんなものであるかをはなはだ誤解していることになる。<sup>14)</sup>

と言っている。これらの発言は、上述のような金本から曾本への改変の意図を示唆するものであろう。

(9)は「離奇」も「迷離」もどちらも「ぼんやりしてつかみ所がない」というような意味なので、どちらを使っても良いように思われる。「足翻」と「可翻」も意味にそれほど大きなへだたりがあるわけではないが、どちらかと言えば曾本の「可翻」の方が適当ではないだろうか。

(10)の Chi-fu は「芝罘」で、Sangton は「山東」であろう。芝罘は山東省にあるので Sangton にしても差障りはないものの、金雯青が傅彩雲と識り合う前に馴染を重ねたのは煙台（芝罘半島にある）の新燕という妓女であったから、金本どおり Chi-fu でも差支えないように思われるが、曾本は少しボカしたかったのかも知れない。

(11)は『史記』范雎伝に「綈袍恋恋、故人の意有り」（魏の須賈が范雎の寒苦を憐んで衣服を与えた故事、旧恩を懐う喩）とあり、曾本でことさら「故人之誼」と変える必要はないようだ。

(12)金本の「懾」は「おそれをなす、おびえる」という意味で、ここは金雯青が新燕によく似た女（つまり傅彩雲）に会って驚く場面なので曾本の「振魄」の方がむしろふさわしいのではなからうか。

(13)は第一回の末尾に当るが、金本ではきわめて簡略に「愛自由者が奴楽島の歴史を読んで、自分もどこかでそんな話を聞いたことがあるような気がするものの思い出せずにいた所へ『開戦だ！ 開戦だ！』という声が聞こえたのでとび出してみると、二人の人が新聞をのぞきこんでいた。正に“南朝歌舞、鈞天楽しみ、北省の烽烟、突然に驚かす”とのみで終わっているのに対し、曾本では「愛自由者が時計の音にふと気がつくと、絶世の美女も虎豹豺狼も何もかも消え去り、太陽が沈みかけていた。中国にもこんなことがあるようだ、忘れないうちにと書きかけたが、友人の東亜病夫を思い出して小説林社を訪ね、愛自

14) 『資料』142頁。

由者が話しながら東亜病夫が書いていった。正にここに描かれている三十年の旧事はみな血痕なのだ、四億の同胞よ、早く覚醒してくれ！」と変わり、その後金松岑と二人で相談して決めたという全六十回の回目が列挙されている。

ここでは金本から曾本への推移が簡単に語られると同時に、

私が初めて葎海花を発表した時、革命思想——その時期の革命思想——を含んでいたために親しい人々に罪を得ることがひじょうに多かった。<sup>15)</sup>

と後年自ら述懐しているように、当時の先進的知識人の正に血を吐くような叫びをここに叩きつけている点が興味深い。「早く覚醒してくれ！」というこの一句は、その行動の軌跡や作品（曾樸のもう一つの小説『魯男子』や翻訳なども含めて）から相当の情熱家であったことをうかがわせる曾樸の心からの叫びであったと考えられ、とすれば後述するような第二回の科学批判の筆鋒の鋭さも首肯できるのである。

(15)の回目の変更は、曾本の第二回の内容が冒頭から2506字にわたって金本とはまったく変えられたために生じたものである。ここは金本の方は曾本の五分の二の1027字<sup>16)</sup>にすぎず、その内容は「地球の五大強国の一つのロシアは八百年前ジンギスカンの侵略を受けたが、1682年になってピョートル大帝が専制政体を完成し、諸国を降して内政外交はまたたく間に発展した。彼は『我がロシアは必ず大総督府をアムール川上に開き、極東の制海権を握るべし』と遺言し、それは今日答えられた。1858年、シベリア総督は黒竜江以北とウスリー江沿岸の地をすべて分割した。

光復の理から言えば、異人種が侵入してある国を分割したなら百年後、二百年後であろうとも光復するべきで、さらに敵の根拠地に突進して反対に分割してこそ無念を晴らしたと言える。皆さん、思い出してごらん下さい、我々、中国の国民はどのように生きて来たか——一日として仇を返すことも、怒りの一言を口に出すこともできなかったではないか。太平天国革命の烈火も次第に下

15) 病夫「編者一個忠実の答覆」『真美善』第1巻第4号 2頁 1927年12月16日（『真美善』は京都大学所蔵本のコピーによる）『清末小説研究』第3号 1978. 10. 31にも収録。

16) 但し、中華民国史料叢編の『江蘇』では「惟有一個奴威哥律共和國算是(僥倖)不曾受他鉄鞭的打撃」と「僥倖」の二字が入っており、それを含めると1029字になる。

## 年表（カッコ内は陰暦）

においてロシアに抵抗するよう  
要求することを決定

郭廷以編著『近代中国史事日誌』第二冊  
1903年

5月1日（4. 5）ロシア，七項目の要求  
を再提出

2月7日（1. 10）ロシアが満州からの第  
二期の撤兵中止を決定

5月15日（4. 19）ロシア皇帝，満州にお  
ける権勢を独占する決意を示す

4月18日（3. 21）ロシアは撤兵のための  
七項目の要求を中国外務部へ提出  
（日英米はロシアのその要求  
を容れないよう中国側に工作）

6月5日（5. 10）ロシア海軍提督 Starck  
軍艦四隻を率いて朝鮮の済物浦  
に至る

4月26日（3. 29）ロシアはハルビン，チ  
チハルなどの諸都市と松花江及  
びチチハルから海蘭江に至る大  
道を奪取することを決定

8月3日（6. 11）日本の小村外相は駐露  
日本大使に，ロシアは日本が朝  
鮮において優越的利益を有し，  
日本もロシアが満州において鉄  
道に関する特殊な利益を有する  
ことを相互に承認するように申  
し入れるよう訓令

4月27日（4. 1）上海の張園で拒俄大会  
を開き東三省の新条約に反対

8月9日（6. 17）日本，対露同志会成立

4月29日（4. 3）東京の中国留学生湯  
燦，鈕永建らが拒俄会議を舉行  
し，“拒俄義勇隊”を組織するこ  
とを決定

8月12日（6. 20）ロシアは極東總督府を  
設置

4月30日（4. 4）京師大学堂の学生大会

10月3日（8. 13）中露，撤兵担保条件談  
判停止（中国が拒絶したためロ

火になり，同治三年になって金陵が破れ，続いて捻匪の乱が起こったがまた撲滅された」となっている。

前述したように金松岑は，中国がロシアの外交に注目している情勢に鑑みて『孽海花』を構想したのだが，これはそのロシアの勢力拡張の歴史的過程を述べ，ロシアに対する復讐を呼びかける文章なのである。

ところが曾本ではこの部分はそっくり削除され，代わりに「これは歴代の専制君主が我が同胞を束縛するもっとも悪らつな手段である」ときめつける痛烈な科学批判が二千余字にわたって叙述されるのである。では何故こういう相違が生じたのだろうか。年表を参照されたい。

この年表に見られるように，1903年にはロシアが東三省の権益独占を企図して軍隊の駐留を続け，それに対する警戒心が中国各地に高まるが，一方，それは日本の野望と衝突するために1904年2月，ついに日露戦争が勃発する。中国の民族資産階級は帝国主義戦争の狭間で自立の道を求めて憲政施行の要求を清

|   |   |
|---|---|
| シヤは専ら日本と交渉することを決定)  | 勵し国本を植立しようとする   |
| 10月6日(8.16)日露, 第一次談判を举行   | 6月23日(5.10)日本, 満州軍総司令を設置  |
| 10月13日(8.23)ロシア, 極東特別委員会を設置, ロシア皇帝が主席に就任                                | 7月14日(6.2)日本軍の総司令大山巖, 大連に上陸   |
| 10月28日(9.9)ロシア軍, 奉天省城の各官庁を占拠し, 將軍増祺を拘禁                                  | 8月24日(7.14)日露, 遼陽大戦開始   |
| 12月10日(10.22)ロシア, 撤兵を拒絶   | 9月4日(7.25)日本軍, 遼陽占領   |
| 12月15日(10.27)蔡元培らの“対俄同志会”が“俄事警聞”を発刊                                     | 12月28日(11.22)日本軍, 旅順の二龍山を占領   |
| <b>1904年</b>  | <b>1905年</b>  |
| 2月9日(12.24)ロシア, 日本に対して宣戦  | 3月10日(2.5)日本軍, 瀋陽占領   |
| 3月23日(2.7)フランス, ロシア, イギリス, ベルギー出使大臣の孫宝琦, 胡惟徳, 張徳彝, 楊兆璽, 変法を奏請し, 以って人心を激 | 5月27日(4.24)日露, 対馬海戦   |
|   | 9月2日(8.4)袁世凱, すぐ科挙を停止して学堂を推し広め, 実学に趨くのに便利にようにすることを奏請, 翌年から全ての郷試, 会試を停止することを許可する詔勅が発布される |
|   | 9月5日(8.7)日露, 平和条約をアメリカのポーツマスで調印   |

政府につきつける。その中で科挙制度に対する批判も高まり、1905年9月、翌6年から科挙の試験を停止する旨の詔勅が出されるに至る。1903年と04年のこうした中国の国内情勢の推移が、金本と曾本の相違をもたらす一つの要因となったと考えられる。

(21)(23)(24)(26)(27)で名前が変わっているのは、金本では登場人物に本名を使ったのに対し、曾本ではそれらを仮名にしたためである。曾樸は後年、

(孽海花を) 岳父の沈梅孫が読んでその内容が先輩・友人の軼事にわたっているため私が親友に罪を得ることを恐れて出版を許さず原稿を隠してしまった。しかし、『孽海花』は私の心血をそそいだ結晶であり、埋没させるに忍びず隙をみてこっそり持ち出して印刷したのである。<sup>17)</sup>

と述べているように、曾之撰という名士を父に持ち自らも京官として清末の高

17) 『資料』142頁。

級官僚や名士、文人たちの言行をよく知り得る立場にあった曾僕としては、実名を使用することは憚られたのであろう。

上述したように、大幅な内容の改訂の原因は、(8)のように多分にこの二人の作家としての資質の相違によるもの、(14)のように執筆時期の相違によるもの、(16)のように愛国学社に参加し、強い革命思想を有していた金松岑と、地主階級から民族資産階級への転化を志向していた曾僕との思想的相違（もちろん曾僕も『孽海花』中に革命思想を含んでいることは認めているものの、現実への対応は金松岑と異なり製糸業に手を出したり、預備立憲公会に参加したり、端方の幕僚になったりしている）に執筆時期のズレが加わったものなど、その要因は一つではないが、文体および構成はおおむね曾本の方が金本より良くなっており、やはり『孽海花』は金松岑自身の手になるより曾僕に引継がれた方が、小説としての成功度は高かっただろうと考えられる。

## 付記

本稿のテーマについては数年前、中野美代子先生から御教示いただいたこともあり、私自身も『孽海花』研究の過程で曾僕と金松岑の関係についてはずっと気になっていたが、資料不足のためにのびのびになっていた。ところが最近、樽本照雄氏から『孽海花資料』のコピーを御送付いただいた所、曾僕の二十回本と金松岑の『江蘇』掲載の二回分との比較がされていて、私の手元にある二十回本及び『江蘇』とあわせて参照できるようになったので、早速本稿をまとめてみた。二氏の御援助に厚く感謝する次第です。

(むぎお とみえ)